

日蓮大聖人御書全集

そやどのごへんじ

曾谷殿御返事

りんだおう こと

（輪陀王の事）

新版
1439
〜
1447

そやどのごへんじ りんだおう こと

曾谷殿御返事（輪陀王の事）

こうあん ねん がつ にち さい そやどうそう

弘安2年('79) 8月17日 58歳 曾谷道宗

や ごめにたわら た お
焼き米二俵、給び畢わんぬ。

こめ すこ おぼ そうら ひと じゆみよう つ

米は少しと思しめし候えども、人の寿命を継ぐものに
そうろう いのち さんぜんだいせんせかい か もの そうろう

て 候。命をば、三千大千世界にても買わぬ物にて候と、

ほとけ と たま こめ いのち つ もの たと こめ あぶら

仏は説かせ給えり。米は命を継ぐ物なり。譬えば、米は油
いのち ともしび ほけきよう ともしび ぎようじや

のごとく、命は灯のごとし。法華経は灯のごとく、行者
あぶら だんな あぶら ぎようじや ともしび

は油のごとし。檀那は油のごとく、行者は灯のごとし。
いっさい ひやくみ なか にゆうみ もう うし にゆうだいいち

一切の百味の中には、乳味と申して牛の乳第一なり。

ねはんぎよう しち い しよみ なか にゆう もつと だいいち

涅槃經の七に云わく「なお諸味の中に乳は最もこれ第一

うんぬん にゆうみ 煎 らくみ

なるがごとし」云々。乳味をせんずれば酪味となる。酪味を

ないしだいごみ だいがみ ごみ なか だいいち

せんずれば、乃至醍醐味となる。醍醐味は五味の中の第一な

ほうもん ごみ 譬 じゆか さんぜん げどう

り。法門をもつて五味にたとえば、儒家の三千、外道の

じゆうはちだいきよう しゆみ あごんきよう だいがみ あごんきよう

十八大經は衆味のごとし。阿含經は醍醐味なり。阿含經は

にゆうみ かんぎようとう いっさい ほうどうぶ きよう らくみ

乳味のごとく、觀經等の一切の方等部の經は酪味のごと

いっさい はんにやきよう しょうそみ けごんきよう じゆくそみ むりようぎきよう

し。一切の般若經は生蘇味、華嚴經は熟蘇味、無量義經と

ほけきよう ねはんぎよう だいがみ ねはんぎよう だいがみ

法華經と涅槃經とは醍醐のごとし。また涅槃經は醍醐のご

ほけきよう ごみ しゆ みようらくだいいち

とし、法華經は五味の主のごとし。妙樂大師云わく「もし

きようし ろん

ほつけ

かいごん

けんのん

きよう

教旨を論ぜば、法華はただ開権・顕遠のみをもつて教の

しようしゆ

ひと みよう

な う

こころ

あ

うんぬん

正主となす。独り妙の名を得。意ここに在り」云々。ま

い ゆえ し

ほつけ

だいご

しようしゆ

た云わく「故に知んぬ、法華はこれ醍醐の正主なることを」

とううんぬん

しゃく

まさ

ほけきよう

ごみ

なか

等云々。この釈は、正しく法華経は五味の中にはあらず。

しゃく

こころ

ごみ

じゆみよう

養

じゆみよう

ごみ

しゆ

この釈の心は、五味は寿命をやしなう、寿命は五味の主

なり。

てんだいしゆう

ふた

こころ

いち

けごん

ほうどう

はんをや

天台宗には二つの意あり。一には、華嚴・方等・般若・

ねはん ほつけ

おな

だいがみ

しゃく

こころ

にぜん

涅槃・法華は、同じく醍醐味なり。この釈の心は、爾前と

ほつけ

そうじ

似

せけん

がくしやとう

すじ

し

法華とを相似せるにいたり。世間の学者等、この筋のみを知

つて、法華經は五味の主と申す法門に迷惑せるゆえに、

しよしゅう

誑

かい みかいこと

おな

諸宗にたぼらかさるるなり。「開・未開異なれども、同じ

えん

うんぬん

しやくもん

こころ

しよきよう

ごみ

く円なり」と云々。これは迹門の心なり。「諸經は五味、

ほけきよう

ごみ

しゆ

もう

ほうもん

ほんもん

ほうもん

法華經は五味の主」と申す法門は、本門の法門なり。この

ほうもん

てんだい

みようらく

か

たま

そうら

ふんみよう

法門は、天台・妙樂ほぼ書かせ給い候えども、分明なら

がくしや

ぞんち

ざるあいだ、学者の存知すくなし。

しやく

きようし

ろん

書

そうろう

ほけきよう

この釈に「もし教旨を論ぜば」とかかれて候は、法華經

だいまく

きようし

そうろう

かいごん

もう

ごじ

の題目を「教旨」とはかかれて候。「開權」と申すは、五字

なか

け

いちじ

けんのん

そうろう

ごじ

の中の「華」の一字なり。「顯遠」とかかれて候は、五字の

なか れん いちじ 中の「蓮」の一字なり。ひとり妙の名を得」とかかれて候 そうろう

みよう いちじ は、「妙」の一字なり。「意ここに在り」とかかれて候は、
こうろ あ そうろう

ほけきよう いちだい こうろ もう だいもく そうろう

法華經を一代の意と申すは題目なりとかかれて候ぞ。こ

れをもつて知るべし、法華經の題目は一切經の神、
し ほけきよう だいもく いっさいきよう たましい

いっさいきよう がんもく

一切經の眼目なり。

だいにちきようとう いっさいきよう ほけきよう

大日經等の一切經をば法華經にてこそ開眼供養すべき
だいにちきようとう いっさい もくえ ほとけ かいげん そうら

ところに、大日經等をもつて一切の木画の仏を開眼し候
にほんこく いっさい じとう ぶつぞうとう かたち ほとけ に

えば、日本国の一切の寺塔の仏像等、形は仏に似たれど
こうろ ほとけ くかい しゅじよう こうろ ぐち もの

も、心は仏にあらず、九界の衆生の心なり。愚癡の者を

ちしや

はじ

くに

費

い

智者とすること、これより生まれり。国のついでのみ入つ

いの

かえ

ほとけへん

ま

き

こくしゆ

て祈りとならず。還つて仏變じて魔となり鬼となり国主

ないしばんみん

煩

いま

ほけきよう

ぎようじゃ

だんな

乃至万民をわずらわす、これなり。今、法華經の行者と檀那

しゆつたい

ゆえ

ひやくじゆう

ししおう

厭

そうもく

かんぷう

との出来する故に、百獣の師子王をいとい、草木の寒風

恐

置

をおそるるがごとし。これはしばらくおく。

ほけきよう

なにゆえ

しよきよう

すぐ

いつさいしゆじよう

もち

法華經は何故ぞ諸經に勝れて一切衆生のために用いる

もう

たと

そうもく

だいち

はは

こくう

ことなるぞと申すに、譬えば、草木は大地を母とし、虚空を

ちち

かんう

じき

かぜ

たましい

にちがつ

乳

母

父とし、甘雨を食とし、風を魂とし、日月をめのととし

しょうちよう

はな咲

み生

いつさいしゆじよう

じつそう

て生長し、花さき菓なるがごとく、一切衆生は実相を

だいち

むそう

こくう

いちじよう

かんう

いこんとうだいいち

大地とし、無相を虚空とし、一乗を甘雨とし、已今当第一

ことば

おおかげ

じようえりきしようこん

にちがつ

みようかく

くどく

の言を大風とし、定慧力莊嚴を日月として妙覺の功德を

しようちよう

だいじだいひ

はな

あんらくぶつか

み

いつさい

生長し、大慈大悲の花さかせ、安樂仏果の菓なつて、一切

しゆじよう

やしな

たも

衆生を養い給う。

いつさいしゆじよう

しよく

じゆみよう

たも

じき

たすう

一切衆生、また食するによりて寿命を持つ。食に多数

ど しよく

みず

しよく

ひ

しよく

かぜ

しよく

しゆじよう

あり。土を食し、水を食し、火を食し、風を食する衆生

ぐら

もう

むし

かぜ

しよく

颶

鼠

もう

むし

もあり。求羅と申す虫は風を食す。うぐろもちと申す虫は

ど しよく

ひと

ひにく

こつずいとう

しよく

きじん

にようふん

土を食す。人の皮肉・骨髓等を食する鬼神もあり。尿糞

とう

しよく

きじん

じゆみよう

しよく

きじん

こえ

等を食する鬼神もあり。寿命を食する鬼神もあり。声を

しよく きじん いし しよく 魚 鉄 しよく

食する鬼神もあり。石を食するいお、くろがねを食する

摸 ちじん てんじん りゆうじん にちがつ たいしやく だいぼんのう にじよう

ばくもあり。地神・天神・竜神・日月・帝釈・大梵王・二乗・

ぼさつ ほとけ ぶつぼう 嘗 み たましい たも

菩薩・仏は仏法をなめて身とし、魂とし給う。

れい ないおう かこ りんだおう もう だいおう

例せば、乃往過去に輪陀王と申す大王ましましき。

いちえんぶだい しゆ けんおう おう 何 もの くご

一閻浮提の主なり、賢王なり。この王はなに物をか供御と

たも もう はくば な こえ 聞 み しようちよう

し給うと申せば、白馬の鳴く声をきこしめして、身も生長

しんしん あんのん 世 保 たも 例 かま もう

し身心も安穩にして、よをたもち給う。れいせば、蝦蟇と申

むし はは 鳴 こえ き しようちよう あき 萩

す虫の、母のなく声を聞いて生長するがごとし。秋のはぎ

鹿 な はな 咲 ぞうげそう 雷 こえ

のしかの鳴くに花のさくがごとし。象牙草のいかずちの声

にはらみ、孕 ざくろ いし 遇 栄 柘榴の石におうてさかうるがごとし。

されば、この王、おう はくば 多 集 飼 たも 白馬をおおくあつめてかわせ給う。ま

た、この白馬は白鳥をみてなく馬なれば、はくば はくちよう 見 うま鳴 おおくの白鳥を

あつめ給いしかば、たま わ み あんのん ひやつかん 我が身の安穩なるのみならず、百官

万乗もさかえ、ばんじよう 栄 てんか ふううとき たこく 頭 天下も風雨時にしたが、他国もこうべを

かたぶけてすねんすごし給うに、傾 数 年 たも 政 相 違 まつりごとのそういにや

はんべりけん、しゆくゐう かほう っ せんまん また宿業によつて果報や尽きけん、千万の

白鳥一時にうせしかば、はくちよう いちじ 失 むりよう はくば 鳴 止 また無量の白鳥もなくことやみぬ。

大王は白馬の声をきかざりしゆえに、だいおう はくば こえ 聞 はな 萎 花のしぼめるがごと

く、月のしよくするがごとく、御身の色かわり、力よわく、

ろっこん

濛

々

耄

后

六根もうもうとしてほれたるがごとくありしかば、きさき

濛々

たま

ひやつかんばんじよう

ももうもうしくならせ給い、百官万乗もいかんがせんと

歎

てん

曇

ち

震

おおかせ

旱

魃

なげき、天もくもり、地もふるい、大風・かんばちし、

飢渴

疫

病

ひと

し

にく

塚

ほね

けかち・やくびように人の死すること、肉はつか、骨は

瓦

見

たこく

襲

きた

かわらとみえしかば、他国よりもおそい来れり。

とき だいおう

歎

たま

詮

この時、大王いかんがせんとなげき給いしほどに、せんず

ぶっしん

祈

くに

るところは仏神にいのるにはしくべからず。この国に、も

げどう 多

くにぐに

塞

ぶっぼう

とより外道おおく国々をふさげり。また仏法というものを

多 崇 置 くに だいじ

おおくあがめおきて国の大事とす。いずれにてもあれ、

はくちよう 出 はくば 鳴 ほう げどう

白鳥をいだして白馬をなかせん法をあがむべし。まず外道

ほう 仰 付 すうじつ 行 はくちよういっぴき

の法におおせつけて、数日おこなわせけれども、白鳥一疋

出 来 はくば 鳴 とき げどう 祈

もいでこず、白馬もなくことなし。この時、外道のいのり

止 ぶつきよう 仰 付 とき めみようぼさつ

をとどめて、仏教におおせつけられけり。その時、馬鳴菩薩

もう しょうそういちにん 召 出 そう 宣

と申す小僧一人あり。めしいだされければ、この僧のたま

こくちゆう げどう じゃほう 止 ぶつぼう ぐつう たも

わく「国中に外道の邪法をとどめて仏法を弘通し給うべく

うま 鳴 易 ちよくせん い 仰

ば、馬をなかせんことやすし」という。勅宣に云わく「おお

とき めみようぼさつ さんぜじつぼう ほとけ

せのごとくなるべし」と。その時に馬鳴菩薩、三世十方の仏

祈 請 もう

はくちようしゅつたい はくば

にきしようし申せしかば、たちまちに白鳥出来せり。白馬

はくちよう み ひと 声 鳴 だいおう うま こえ ひと 聞

は白鳥を見て一こえなきけり。大王、馬の声を一こえきこ

まなこ ひら たも はくちようにな いしひやくせん

しめして、眼を開き給う。白鳥二ひき、乃至百千いでき

ひやくせん はくばいちじ よろこ だいおう おん

たりければ、百千の白馬一時に悦びなきけり。大王の御

色 直 につ 蝕 本 復 み

いろなおること、日しよくのほんにふくするがごとし。身の

ちから こころ 計 ごと ささぎき ひやくせんまん 倍 超 后

力、心のはかり事、先々には百千万ばいこえたり。きさき

喜 だいじん くぎよう 勇 ばんみん 掌

もよろこび、大臣・公卿いさみて、万民もたなごころをあ

たこく 頭 傾 そうつろ

わせ、他国もこうべをかたぶけたりとみえて候。

いま 世 違 てんじんしちだい ちじん

今のよも、またこれにたがうべからず。天神七代・地神

ごだい いじようじゆうにだい じようこう

せんぜ 戒 力 ふくりき

五代、已上十二代は成劫のごとし。先世のかいきと福力

こんじよう 励

くに 治

ひと

とによつて、今生のはげみながらも、国もおさまり、人

じゆみよう なが にんのう 代

にじゆうくだい

せんぜ

の寿命も長し。人王のよとなりて二十九代があいだは先世

戒 力 少 弱

こんじよう

政

果 無

のかいきもすこしよわく、今生のまつりごともはかなか

くに 漸 さんさいしちなん起

りしかば、国にようやく三災七難おこりはじめたり。なお、

漢 土 さんこうごてい よ 治

書 渡

かんどより三皇五帝の世をおさむべきふみわたりしかば、

かみ 崇 くに さいなん 鎮

それをもつて神をあがめて国の災難をしずむ。

にんのうだいさんじゆうだいきんめいてんのう よ

くに せんぜ 戒

人王第三十代欽明天皇の世となりて、国には先世のかい

福 薄 あくしん 強 盛

多 い き

ぜんじん

ふくうすく、悪心ごうじようのもののおおく出で来て、善心

愚

あくしん

賢

げてん

教

浅

罪

おろかに悪心はかしこし。外典のおしえはあさし、つみも

重

げてん 捨

ないてん

例

おもきゆえに、外典すてられ内典になりしなり。れいせば、

守屋

にほん

てんじんしちだい

ちじんごだい

あいだ

ももやそがみ

崇

もりやは日本の天神七代・地神五代が間の百八十神をあが

ぶつきよう

弘

げてん

めたてまつりて、仏教をひろめずしてもとの外典となさん

析

しょうとくたいし

きようしゆしやくそん

ごほんぞん

といのりき。聖徳太子は教主釈尊を御本尊として、

ほけきよう

いつさいきよう

文書

りようほう

勝

負

法華経・一切経をもんじよとして両方のしようぶありし

かみ

負

ほとけ

勝

たま

しんこく

初

に、ついには、神はまけ仏はかたせ給いて、神国はじめて

ぶつこく

てんじく

かんど

れい

いま

さんがい

仏国となりぬ。天竺・漢土の例のごとし。「今この三界は、

みな

わ

う

きようもん

顕

たも

ついで

皆これ我が有なり」の経文あらわれさせ給うべき序なり。

きんめい

かんむ

にじゅう 世だい

にひやくろくじゅうよねん

欽明より桓武にいたるまで、二十よ代・二百六十余年が

あいだ

ほとけ

だいおう

かみ

しん

よ

治

たま

間、仏を大王とし神を臣として世をおさめ給いしに、

ぶつきよう

勝

かみ

劣

世

治

仏教はすぐれ神はおとりたりしかども、いまだよおさまる

疑

ことなし。いかなることにやとうたがわしかりしほどに、桓

かん

む ぎよう えんぎようだいし もう しょうにんしゆつたい

かんが

い

武の御宇に伝教大師と申す聖人出来して、勘えて云わ

かみ

負

ほとけ

勝

たま

ほとけ

だいおう

かみ

しん 下

く「神はまけ仏はかたせ給いぬ。仏は大王、神は臣かな

じようげ 相 次

礼 儀

こくちゆう 治

れば、上下あいついであれいぎただしければ国中おさまるべ

くに

静

不

審

しとおもうに、国のしずかならざることふしんなるゆえに

いっさいきよう

勘

そうら

どうり

そうら

ぶつきよう

一切経をかんがえて候えば、道理にて候いけるぞ。仏教

大

失

いつさいきよう

なか

ほけきよう

もう

におおきなるとがありけり。一切経の中に法華経と申す

だいおう

けごんぎよう

だいぼんきよう

じんみつきよう

あごんきよう

大王おわします。ついで華嚴経・小品経・深密経・阿含経

とう

しん

くらい

侍

位

等は、あるいは臣の位、あるいはさぶらいのくらい、ある

民

くらい

はんにやきよう

ほけきよう

いはたみの位なりけるを、あるいは般若経は法華経には

勝

さんろんしゆう

じんみつきよう

ほけきよう

すぐれたり〈三論宗〉、あるいは深密経は法華経にすぐれ

ほつそうしゆう

けごんぎよう

ほけきよう

たり〈法相宗〉、あるいは華嚴経は法華経にすぐれたり

けごんしゆう

りつしゆう

しよしゆう

はは

もう

〈華嚴宗〉、あるいは律宗は諸宗の母なりなんと申して、

いちにん

ほけきよう

ぎようじや

せけん

ほけきよう

どくじゆ

一人として法華経の行者なし。世間に法華経を読誦するは、

かえ

痴

失

てん

怒

還つておこづき、うしなうなり。これによつて、天もいかり、

しゅご ぜんじん ちから うんぬん ほけきよう 讃

守護の善神も力よわし」云々。いわゆる「法華経をほむと

かえ ほつけ こころ 殺 とううんぬん

いえども、返つて法華の心をころす」等云々。

なんとしちだいじ じゅうごだいじ にほんこくじゅう しよじしよさん しよそうとう

南都七大寺・十五大寺、日本国中の諸寺諸山の諸僧等、

聞 大 怒 てんじく だいてん かんど

このことばをききておおきにいかり、「天竺の大神、漢土の

どうし わ くに しゅつたい さいちよう もう こぼうし

道士、我が国に出来せり。いわゆる最澄と申す小法師こ

詮 い 合 ところ 頭

れなり。せんずるところは、行きあわんずる処にてかしら

破 肩 切 落 打 罵 もう

をわれ、かたをきれ、おとせ、うて、のれ」と申せしかど

かんむてんのう もう けんおう 尋 明 ろくしゅう 僻 ごと

も、桓武天皇と申す賢王たずねあきらめて、六宗はひが事

はじ 比 叡 ざん 建 立 てんだい

なりけりとて、初めてひえい山をこんりゆうして天台

ほつけしゅう

定

置

えんどん

かい

こんりゅう

たも

法華宗とさだめおかせ、円頓の戒を建立し給うのみならず、

しちだいじ

じゅうごだいじ

ろくしゅう

うえ

ほつけしゅう

添

置

七大寺・十五大寺の六宗の上に法華宗をそえおかる。せん

ろくしゅう

ほけきょう

ほうべん

例

ずるところ、六宗を法華經の方便となされしなり。れいせ

かみ

ほとけ

負

もん

守

にほんこく

ば、神の仏にまけて門まぼりとなりしがごとし。日本国も

ほつけさいだいいち

きょうもん

はじ

またまたかくのごとし。「法華最第一」の經文、初めてこ

くに

あらわ

たま

よ

いちにん

ほけきょう

の国に顕れ給い、「能くひそかに一人のためにも、法華經を

と

によらい

つか

はじ

くに

い

たま

かんむ

説かば」の如来の使い、初めてこの国に入り給いぬ。桓武・

へいぜい

さが

さんだい

にじゅうよねん

あいだ

にほんいつしゅうみなほけきょう

平城・嵯峨の三代、二十余年が間は、日本一州皆法華經の

ぎょうじや

行者なり。

しかれば、梅檀には伊蘭、釈尊には提婆のごとく、伝教

だいし どうじ こうぼうだいし もう しょうにんしゆつげん かんど 渡

大師と同時に弘法大師と申す聖人出現せり。漢土にわた

だいにちきよう しんこんしゆう 習 にほんこく

りて大日経・真言宗をならい、日本国にわたりてありし

でんぎよう だいし ごぞんしろう おんとき 甚 ほけきよう

かども、伝教大師の御存生の御時はいとう法華経に

だいにちきよう 勝 言 でんぎよう

大日経すぐれたりということはいわざりけるが、伝教

だいし い こうにんじゆうさんねんろくがつよつか 隠 たま

大師、去ぬる弘仁十三年六月四日にかくれさせ給いてのち、

隙 得 思 こうぼうだいし い こうにんじゆうしねん

ひまをえたりとやおもいけん、弘法大師、去ぬる弘仁十四年

しょうがつじゆうくにち しんこんだいichi けこんだいに ほつけだいさん ほけきよう

正月十九日に、真言第一・華嚴第二・法華第三、法華経は

けろん ほう むみよう へんいき てんだいしゆうとう ぬすびと もう しょ

戲論の法、無明の辺域、天台宗等は盗人なりなんと申す書

どもをつくりて、嵯峨の皇帝を申しかすめたてまつりて、

しちしゅう しんこんしゅう もう 加 しちしゅう ほうべん しんこんしゅう

七宗に真言宗を申しくわえて、七宗を方便とし、真言宗

しんじつ もう た お

は真実なりと申し立て畢わんぬ。

のち にほんいつしゅう ひと しんこんしゅう うえ のち

その後、日本一州の人ごとに真言宗になりし上、その後

でんぎようだいし みでし じかく もう ひと かんど

また、伝教大師の御弟子・慈覚と申す人、漢土にわたりて、

てんだい しんこん にしゅう おうぎ 極 きちよう ひと

天台・真言の二宗の奥義をきわめて帰朝す。この人、

こんごうちようきよう そしつじきよう にぶ しよ 造 ぜんとういん もう

金剛頂経・蘇悉地経の二部の疏をつくりて、前唐院と申す

てら えいざん もう た お だいにちきようだいいち

寺を叡山に申し立て畢わんぬ。これには大日経第一・

ほけきようだいに なか こうぼう かごん 数

法華経第二、その中に弘法のごとくなる過言かずうべから

先々少々もうお
ず。せんぜんに、しようしよう申し畢わんぬ。

ちしようだいし

だいし

後

繼

園

城

じ

智証大師、またこの大師のあとをついで、おんじよう寺に

ぐつう

当時

てら

くに

禍

見

てら

弘通せり。とうじ、寺とて国のわざわいとみゆる寺これな

えいざん

さんぜんにん

じかく

ちしよう

しんごん

り。叡山の三千人は、慈覚・智証おわせずば、真言すぐれ

もう

用

ひと

えんにんだいし

いっさい

たりと申すをばもちいぬ人もありなん。円仁大師に一切の

しよにん

口

塞

こころ

誑

出

諸人くちをふさがれ、心をたぼらかされて、ことばをいだ

ひと

おうしん

ご帰依

でんぎよう

こうぼう

ちようか

見

す人なし。王臣の御きえもまた伝教・弘法にも超過してみ

そうら

叡

ざん

しちじ

にほんいつしゅういちどう

ほけきよう

え候えば、えい山、七寺、日本一州一同に「法華経は

だいにちきよう

劣

うんぬん

ほけきよう

ぐつう

てらでら

しんごん

大日経におとり」と云々。法華経の弘通の寺々ごとに真言

広

ほけきよう

頭

ひろまりて法華經のかしらとなれり。かくのごとくして、

しひやくよねん

そうら

じゃけん

すでに四百余年になり候いぬ。ようやくこの邪見

増長

はちじゅういちないしご

ごおう

失

ぶつぼう

ぞうじようして、八十一乃至五の五王、すでにうせぬ。仏法

おうぼう

尽お

うせしかば、王法すでにつき畢わんぬ。

ぜんしゆう

もう

だいじやほう

ねんぶつしゆう

もう

しyouじやほう

あまつさえ、禪宗と申す大邪法、念仏宗と申す小邪法、

しんごん

もう

だいあくほう

あくしゆう

鼻

いつこく

盛

真言と申す大悪法、この悪宗、はなをならべて一国にさかん

てんしyouだいじん

魂

失

氏子

守

なり。天照太神はたましいをうしなつてうじこをまぼらず、

はちまんだいぼさつ

いりき

くに

しゆご

結

句

たこく

八幡大菩薩は威力よわくして国を守護せず、けつくは他国

もの

にちれん

由

み

ぶつぼう

なか

の物とならんとす。日蓮このよしを見るゆえに、「仏法の中

あだ

じごく

お

とう

責

恐

こくしゅ

の怨」「ともに地獄に堕ちん」等のせめをおそれてほぼ国主

示

じゃぎ

誑

しん

たも

にしめせども、かれらが邪義にたぼらかされて信じ給うこ

かえ

だいおんてき

たま

となし。還つて大怨敵となり給いぬ。

ほけきよう

失

ひと

こくちゆう

じゆうまん

もう

ひと知

法華経をうしなう人、国中に充滿せりと申せども、人し

愚癡

失

いま

ることなければ、ただぐちのとがばかりにてあること。今は

ほけきよう

ぎようじゃしゅつたい

にほんこく

ひとびと

おろ

うえ

また法華経の行者出来せり。日本国の人々、癡かの上に

瞋

起

じゃほう

愛

しょうほう

憎

さんどく

いかりをおこす。邪法をあいし、正法をにくむ。三毒

強盛

いつこく

あんのん

えこう

とき

だい

ごうじようなる一国、いかでか安穩なるべき。壊劫の時は大

さんさい起

かさい

すいさい

ふうさい

げんこう

の三災おこる。いわゆる火災・水災・風災なり。また減劫の

とき しょう さんさい

けかち えきびよう かつせん けかち

時は小の三災おこる。ゆわゆる飢渴・疫病・合戦なり。飢渴

だいとん 起

疫 病 愚癡

かつせん

は大貪よりおこり、やくびようはぐちよりおこり、合戦は

しんに

いま にほん こく

ひとびとしじゅうくおくくまんしせん

瞋恚よりおこる。今、日本国の人々四十九億九万四千

はつびやくにじゅうはちにん

なんによ

ひとびと 異

おな

ひと

さんどく

八百二十八人の男女、人々ことなれども、同じく一つの三毒

なんみようほうれんげきよう

きよう

起

さんどく

なり。いわゆる、南無妙法蓮華経を境としておこれる三毒な

ひと

しやか

たほう

じつぽう

しよぶつ

いちじ

罵

責

れば、人ごとに、釈迦・多宝・十方の諸仏を一時にのり、せ

なが

失

すなわ

しょう

さんさい

ついで

め、流しうしなうなり。これ即ち小の三災の序なり。

にちれん

いち

類

かこ

しゆく

習

しかるに、日蓮が一のい、いかなる過去の宿じゆうにや、

ほけきよう

だいもく

檀

那

たも

思

法華経の題目のだんなとなり給うらん。これをもつておぼ

いま ぼんてん たいしゃく にちがつ してん てんしやうだいじん はちまんだいぼさつ
しめせ、今、梵天・帝釈・日月・四天、天照太神・八幡大菩薩、

にほんこく さんぜんいつびやくさんじゆうにしや だいしよう 神 祇 かこ

日本国の三千一百三十二社の大小のじんぎは、過去の

りんだおう はくば にちれん はくちよう われ いちもん

輪陀王のごとし。白馬は日蓮なり。白鳥は我らが一門なり。

はくば 鳴 われ なんみようほうれんげきよう こえ

白馬のなくは我らが南無妙法蓮華經のこえなり。この声をき

たも ぼんてん たいしゃく にちがつ してんとう いろ 増 光

かせ給う梵天・帝釈・日月・四天等、いかでか色をましひかり

盛 たま われ しゅご たま

をさかんになし給わざるべき、いかでか我らを守護し給わざ

強 々 思

るべきと、つよづよとおぼしめすべし。

きへん い さんがつ ごぶつじ がもく しゅあ

そもそも、貴辺の去ぬる三月の御仏事に鵝目その数有り

ことしいつびやく余にん ひと さんちゆう 養 じゆうにとき

しかば、今年一百よ人の人を山中にやしないで、十二時の

ほけきよう 読

だんぎ そうろう

まつだいあくせ

法華經をよましめ、談義して候ぞ。これらは末代惡世に

闇 浮 提 だいいち ぶつじ

そうら

幾

は一えんぶだい第一の仏事にてこそ候え。いくそばくか

かこ しょうりよう 嬉 思

しゃくそん こうよう ひと

過去の聖靈もうれしくおぼすらん。釈尊は孝養の人を

せそん 名 たま きへん せそん

世尊となづけ給えり。貴辺あに世尊にあらずや。

こだいしんのあじやり 歎 そうら

故大進阿闍梨のことなげかしく候えども、これまた

ほけきよう る ふ しゅつたい 因 縁

そうろう

法華經の流布の出来すべきいんえんにてや候らんと

思 ことごと いのち 永

ときさもう

おぼしめすべし。事々、命ながらえば、その時申すべし。

こうあんになんつちのとうはちがつじゅうしちにち にちれん かおう

弘安二年己卯八月十七日 日蓮 花押

そやどうそうごへんじ

曾谷道宗御返事

